



松岡光治 (編),  
『ディケンズ文学における暴力とその変奏  
——生誕二百年記念——』  
Mitsuharu MATSUOKA ed.,  
*Violence and Its Variations in the Works of Dickens:  
A Bicentennial Commemorative Volume*  
(xii+288 頁, 大阪教育図書, 2012 年 10 月,  
本体価格 3,000 円)  
ISBN: 9784271210160

(評) 溝口 薫  
Kaoru MIZOGUCHI

本書は 2012 年のディケンズ生誕 200 年を記念して編まれた中堅・若手のディケンジアン 15 人による論文集である。ディケンズの長編小説 15 編をそれぞれが一作ずつ担当し、共通の主題である暴力について様々な角度から論じている。目次をみると、各論はすべて 16 頁ずつの 4 節立て、作品の図版も口絵以外にそれぞれ 4 葉ずつと、楽曲を思わせる均整のとれた美しい構成になっており、作品ごと、種類ごとに整理された参考文献表や充実した索引に、本書を手にした読者の期待も高まる。

「まえがきに代えて」と「序章」は各論を読む前に読めば、本書が全体として時代と作家をどのような観点から扱っているかを知ることができる。中産階級が台頭したヴィクトリア朝期のイギリス社会は、それ以前に起きたフランス革命や産業革命などの大きな社会機構の変動を経て、前時代の粗暴な社会風潮が後退し、表面的には暴力が抑えられた時代であった。しかし抑圧されたその暴力は、ジェンダーや階級、人種の問題をはじめとして、司法、教育、家庭、親子、個人の内面などあらゆる場で「別なる形で」噴出してくるのである。

15 人の論者はみな構造主義的文化論から論じているわけではないが、おおむねディケンズをマクロ、ミクロの社会暴力を先進的に捉えた作家であることを前提に、作品に窺われる洞察に迫っている。勿論思いがけない視点から作品を読み解く論考も少なくない。重なるテーマを論じる章もあるし、他の作品の考察を交える議論もある。本書を通して読むならば、それぞれの論考は対位旋律あるいは

複雑な輪唱となって響きあい、ディケンズの作風の発展や関心の変化の意外な道筋をみせてくれる。いずれも気鋭の論者たちの才気溢れる論考であり、その優れた点をすべて紹介できないのは残念であるが、以下、紙数の許す限りそれぞれの内容を簡単に紹介してゆく。

颯爽と冒頭を飾るのは「ピックウィック氏のげんこつ」と題された中和彩子氏の『ピックウィック・クラブ』論である。中和氏は、物語の途中に突然挿入される主人公の出自記述や、主人公がいったんふりあげたげんこつを我慢しておろすようになる行動の変化に注目し、この作品が中産階級の脱暴力物語となっていることを明らかにする。紳士は暴力を代行させても直接振るうことがあってはならず、また、暴力を振るわれてもなお、相手を思いやる温情を示し、相手に対して決定的に優位にたつ。中和氏は、ジングルに対してピックウィック氏が最終的に示す父権主義的な温情によって、いったん奪われた紳士の体面を取り戻すばかりではなく、中産階級のアイデンティティ確立物語が完成するとみる。

第2章「逃走と追跡——法と正義という名の暴力」は、本書の編者でもある松岡光治氏の『オリヴァー・トゥイスト』論である。松岡氏はエーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』を援用し、この作品を利益社会ゲゼルシャフトにおける孤独からの逃走の物語として読む。その逃走は、犯罪者達の徒弟組織に身を寄せるオリバー、被虐的愛に生きようとするナンシー、弱者の監視を怠らないフェイギンにみられるばかりではない。正義や法の名を借りて弱者を狩る群衆の追跡もそうなのである。弱者に対するシャーデンフロイデ 毀傷を求める快樂欲求を解放するこの追跡行為は、この作品に登場するほとんどの紳士たちにも認められ、同様に新救貧法や浮浪罪をはじめとする貧民をめぐる強引な法適用にも、公務執行型の暴力としてその傾向が認められるという。

第3章「喜劇としての暴力——舞台と社会の間」を論じるのは、西垣佐理氏である。『ニコラス・ニクルビー』は従来、喜劇的な作品といわれ、そのために社会的洞察が深まらないことを欠点とされてきたのであるが、この論考では、それをいわば逆手に取り、ディケンズがいかに喜劇的な作品を書くという契約に従ってその創作原理を忠実に守っているか、またそのうえでいかに独自の小説世界を新たに切り開こうとしているかを、作品構成にかかわる暴力の扱い方と人物造形に焦点を当てて明らかにしている。論考は着実に明快に書かれている。ただこの作品は喜劇性の奔放な横溢を特長としており、暴力についての議論が喜劇的機能論にとどまったのは、着眼が興味深いだけに、やや残念な気がする。

第4章「音の海を逃れて」と題する『骨董屋』論において、猪熊恵子氏は、この作品に、過剰な感情喚起を求める群衆的読者の暴力的な声の力と、そうした一般的読者から離れて静かに語りたいという作家の葛藤が、音と沈黙のモチーフ

を通して描かれているという斬新な読みを展開する。フォースター宛の書簡においてディケンズが騒がしい読者を『コリオレイナス』の一節を使って形容している部分に注目し、彼がコリオレイナス同様の葛藤に巻き込まれていたと読むくだりは思わず膝を打つ。騒がしいクウィルプから逃れるネルの静寂に逃れる旅路や、語り手の造形変更、作中の静かな読者の前景化、さらに『アメリカ紀行』において騒がしい読者が削除され、静かな読者像が強調されている不均衡に作家の葛藤を詳細に裏付ける論考は説得力がある。

第5章「眠りを殺す」は表題の通り、渡部智也氏による『バーナビー・ラッジ』における眠りのモチーフ論である。渡部氏は、これ以前の作品における眠りと不眠は、比較的単純に生と死とにそれぞれ結びついていたにもかかわらず、この作品においてはその二項対立的な関係が崩れるような複雑な使い方至っているとし、暴動にかかわる人間の意識状態に関する作家の関心の深まりを示している。また本作品における眠りと覚醒は、暴動を循環的なものととらえる歴史認識を表す工夫となっていると述べる。「断眠は究極の暴力である」という第一節の立論強調にはいささか戸惑ったが、最近の医学研究成果と19世紀的な睡眠の思想に関連付けた部分は暴力論に新しい観点を示唆して興味深かった。

第6章、「声なきものたちの逆襲」と題された『マーティン・チャズルウィット』論において、畑田美緒氏は、この作品には、継承と変化のテーマが世代交代の問題を中心に複合的に扱われているとし、急激な社会変化のもと継承の断絶や悪化ばかりではなく、変化のなかで抑圧された老人旧世代の密かな影響力の継続が描かれるなど、新旧両勢力が両面価値的に描かれていると論じる。また、この作品の構成上の難点とみなされてきたアメリカのエピソードにも同様の継承のテーマがイギリスとの親子関係のうちに展開されているとし、この作品の再評価の可能性、ならびに後期の小説につながる特質の獲得を示している。印象深い論考で、トム・ピンチの善なる役割が継承されないとの指摘も鮮烈であった。

第7章の「疾走する汽車と暴力」と題される、松村豊子氏による『ドンビー父子』論は、汽車が象徴する非人間的な機械文明社会の到来によって引き起こされた新たな人間関係の序列化と、ために激化する強者と弱者の抑圧と対立のなかで、その救済を保証するものとしてあらたに感情的絆に基づく家庭の物語を打ち出さざるをえなかった事情を、父権主義的社会における伝統的人間関係修復装置であった決闘の喪失と関連づけて論じた興味深い論考である。松村氏は、父権的男性の家庭での圧倒的権威の揺らぎを可視化させるドンビーや彼に挑む強い精神力を持った女性イーディスに、また広がる交通網とともに深まる混迷のなかで生じているフローレンスの迷子事件の描写に、ディケンズの新しい時代に対する鋭敏で両面価値的な反応を看取している。

第8章、川崎明子氏の「海の抑圧——ロビンソン・クルーソー挽歌」は『デイヴィッド・コパフィールド』を、主人公が英雄的に崇拜する存在の死を心理的に乗り越える「エレジーロマンス」として読み解くスリリングな論考である。川崎氏は、こうしたデイヴィッドの心理的葛藤の淵源を、彼が幼少期に読んだ『ロビンソン・クルーソー』と『クロコダイルの本』に辿れると論じ、海の英雄、ステアフォースとロビンソン・クルーソーの類似を明確にする。そのうえで、海は、容赦なく登場人物の命を奪う危険な場所でありつつも、同時に、中産階級の価値観からの解放される自由の場であり、かつ、父親の導きが機能しない非自己規制のメタファーとなっていると見る。それゆえに、ステアフォースの死を乗り越えたデイヴィッド・コパフィールドは、海とは反対の陸の旅へと向かうという。

第9章「国家・警察・刑事・暴力装置」において中村隆氏は『荒涼館』における国家や警察という制度権力に潜む暴力を論じる。マックス・ヴェーバーの『職業としての政治』における国家権力論を援用しながら、この作品における警察、警官、刑事が、絶対正義の実現において規則にだけ縛られる盲目的な暴力装置的人間として表出されていることを明らかにする。例えば掃除人ジョーを追立て、威嚇しスリの冤罪をかぶせようとする無名の警官はその典型である。一方、中村氏はこの小説における探偵小説性に、バケット警部の私立探偵的人物造形が貢献しているとし、単なる警官とは異なる一面を見せていると指摘する。しかし、そのバケット警部も最終的には、逮捕願望に機械的に従う国家権力の暴力装置として回収されているとする。

第10章「教育の(暴)力」では、玉井史絵氏が『ハード・タイムズ』を挑発的に再読する。玉井氏は、19世紀における教育論とテキストの教育の諸相に詳細にあたりつつ、功利主義を問い返し、一見対立するグラッドグラインドの教育とスリアリーのサーカスの教育をともに相同的な結果を導くものと論じる。玉井氏は教育と娯楽、事実と想像の対照は、実はそれほど単純ではなく、実際には複雑に絡み合っていることを明らかにする。そのうえで、こどもを社会における有用な人材に育てていくプロセスを教育とみるならば、集団に適した人材を育てるという意味では、対立するはずの双方の教育も、それぞれの狙いとは別に、ともに均質な体あるいは均質な心を持つ、フーコーのいう「従順な労働者集団」を生み出すと結論づけるのである。

第11章、武井暁子氏の「内向する暴力——病的自傷者はなぜ生まれるか」は『リトル・ドリット』のなかで最も強烈な印象を残す人物である自虐的なウエイド嬢についての明晰な心理分析である。武井氏は、彼女の自虐と自傷の諸相に「成育環境と病的心理状態の因果関係のモデルケース」を見出し、敢えて心理学

の専門研究にあたりつつ、自傷の定義とその心理メカニズムを明らかにする。そのうえで自傷と自虐によってのみ安心感を得られるという通常の人間の感覚を脅かすウェイド嬢の内面の人生を再構築し、その心理的闇と孤独の深さを浮彫りにしている。また彼女と同様の症状を見せるタッティコーラムについても論じ、ミーグル氏による彼女に対する矯正の風刺性の理解程度は、自己に対して暴力をふるわざるを得ない病的心理についてのディケンズの慧眼をどこまで理解するかにかかっていると締め括る。

第12章、「孤独な群衆の暴力性」は、矢次綾氏の『二都物語』論である。矢次氏は、カーライルが『フランス革命』において群衆を政治的権力かつ歴史的勢力と認め「破壊力と社会的影響力の塊」として描いたのとは対照的に、ディケンズは群衆を「暴力を背景とした斉一性の原理によって心身が拘束された孤独な個人の集まり」として描いていることに注目し、そこに作家独自のフランス革命に対する歴史認識や、群衆による暴力の発生や激化に対する強い懸念を読む。ことに内面に秘密を抱えて孤立した個人は、孤独ゆえに集団心理に流されやすくその暴力は激化し易い。革命家集団のみならず、ロンドンの裁判所につめかける群衆、『バーナビー・ラッジ』の群衆に、ディケンズはその様子を繰り返し描き、懸念を表明していると説く。

第13章「種子=ピップは牢を破って外で花を咲かせるか」は、鶉飼信光氏による『大いなる遺産』論である。互いが互いに対して暴力的にしか関われない罪深い人々が作り上げる暗澹たる作品世界の様相を、細部の驚くべき集積によって読み解きながら、鶉飼氏は、内面的も暴力の連鎖に囚われてしまったピップに敢えて解放の希望を見出そうとする。とはいえ権力の網の目は幾重にも巡らされており、それはほとんど絶望的である。「避けたいと思うものに付きまとわれる」というモチーフにも明らかであるが、その救いの可能性は暴力と両義的にしか現れない。ピップをはじめこの世界の住人が囚われている牢獄は、その対極をなす建設的な希望につながるジョーの「打つ力」によってかろうじてもたらされる可能性を残すのみなのである。

第14章「腕力と知力——欲望と階級」において、宮丸裕二氏は『互いの友』に初期作品には見られない中流階級の内在的な暴力への不安がみられると指摘する。宮丸氏は、まず階級によって腕力、肉体性、暴力への態度に異なる描き方があることをライダーフード、レイバーン、ヘッドストーンを対比させつつ論じ、労働者階級が肉体性のなかに生きて常に潜在的な暴力に晒されているのに対し、上層中産階級は肉体性や暴力と無縁に描かれるとする。一方中産階級は、知性と暴力的欲望の間であって、暴力抑圧と肉体性の忌避を日常的な特徴とし、その暴力は階級移動の危機の動因となっているほか、階級移動に伴う犠牲が身体上の犠

性に置き換えられて表現されるとする。また隠匿しつつ暴露する暴力を語る間接性の語りにも、読者・作者ともに属する中産階級の特徴を見出している。

第15章『エドウィン・ドルードの謎』論で本書のコードを奏でるのは、加藤匠氏の「クロイスタラムに潜む闇の暴力」である。加藤氏は、一見推理小説的に見えるこの作品の中心的関心は、やはり二重性のある悪党ジャスパーにあるとし、この小説における種々の暴力の表象の二重性に注目しつつ、未完に終わったこの小説の意図を「一度にすべてのものを見ることができない人間の二重性」にあるとみて、その構図を描いてみせる。加藤氏は、舞台である古都クロイスタラムの悪業の歴史記述が、消えた過去の暴力が現在の暴力の背後に浮かび上がるパリンプセストとなっていると指摘する。その闇は、ジャスパーの悪をその表面や言葉、論理では読むことのできない周囲の人々の関係、ジャスパーが周囲の人々の人種的偏見と恐怖を利用してネヴィルを凶暴な野人として陥れる悪業、さらには、博愛主義者と対比されるクリスパークルの帝国主義的な「無邪気な虚栄心」などの密かな現在の暴力の通奏低音となっていると述べる。